

第二章 栗野の城と武将

平安時代の終わりごろから武士が台頭し、しもつけ下野国（栃木県）でも足利氏や宇都宮氏、小山氏など多くの有力な武士団が現れました。栗野は、有力な豪族が周囲で争う戦略上重要な地域であったと考えられます。豪族たちは、山や丘に地形を利用した城を築き、戦に備えました。現在も残る土塁や堀、どるい曲輪などの遺構からは、当時の築城技術や防御の考え方をうかがい知ることができます。

本章では、栗野に築かれた代表的な城について、その歴史的背景を交えて紹介します。



▲小山義政自刃の地（中粕尾）

義政は追討軍に敗れ赤石川原で自害したと伝わる。

粟野城―今は市民憩いの場所―

粟野城は旧粟野町の中心部、粟野川と粕尾川（思川）が合流する地点にある通称「城山」^{しのみやま}に築かれた山城です。ここから西に進めば粕尾へ、北の粟沢峠^{くくりさわとうげ}を越えれば上南摩へ向かうことができ、思川沿いを南東に進めば久野から西方方面に出ることもできます。粟野城はこのように、川と道の要衝^{ようしゅう}にあります。現在はツツジの名所として知られる「あわの城山公園」が整備され、多くの人に親しまれています。

●粟野城の成り立ち

粟野城の築かれた年や築城者を示す資料は残っておらず、正確な成り立ちは分かっていませんが、築城についてはいくつかの伝承が残っています。

『粟野町誌 粟野の歴史』では、江戸時代に記された「粟野古記録（※）」の「粟野古城は足利又太郎忠綱の出張^{てはり}である」という記述を取り上げています。「出張」とは、本城から離れた場所に築かれた城や砦^{とりで}のことです。また、一説には暦応元年（一三三八）、平野将監^{しやうげんのりひさ}範久が修築し、粟野・粕尾・南摩を領地としたと伝えられています。

江戸時代に記された軍記物語『皆川正中録』^{みながわ}には、戦国時代に皆川氏と佐野氏が、粟野城や周辺の領地をめぐって何度も対

立した様子が記されています。天正一六年（一五八八）二月、皆川広照^{みながわひろてる}が佐野方だった粟野城を攻撃し、城代の平野大膳久國^{たいぜんひさくに}らを討ち取り、その後、皆川氏に従う落合徳雲^{おちあいでくとん}入道^{にゅうどう}が城代となったといわれています。天正一八年（一五九〇）、豊臣秀吉の小田原征伐に際して、皆川広照は小田原北条氏に味方しました。その後、皆川城は秀吉の命を受けた上杉景勝^{かげかつ}・浅野長吉^{ながよし}らによって攻撃を受けて落城し、粟野城もこの時に落城したと考えられています。しかし『皆川正中録』と、これを元とした二次史料については事実誤認や矛盾などがあり、史実として認める根拠には欠けるという指摘があります。

●粟野城の構造

粟野城は東に向かってU字型の縄張^{なわばり}（城の配置）が特徴であり、北側が「女二城」、南側が「男二城」と呼ばれていますが、名前の由来は分かっていません。

城の大手（正面）は、現在の城山公園の登り口あたりであると考えられます。なお、横尾家墓所の周辺に残る石垣は後世のものです。

U字型の谷間には忠魂碑^{ちゆうこんひ}の背後にある「才二の門」から入ります。ここから山道を進んでいくと、喰違い虎口^{くぐち}（城の出入口）や「女二城」の斜面から延びる豎土墨^{とどろい}や豎掘^{とどろい}を見ることが出来ます。さらに進むと、谷間最奥の「本丸」と呼ばれている

場所にたどり着きます。しかし、平坦面が小さく、見通しがよくないことから、かつて居館があった場所は、十分な平場が確保できる現在の城山公園内であると想定されます。

この谷間最奥の平場から北に向かってさらに斜面を登ると、江戸幕府第一五代將軍であった徳川慶喜よしのぶが書いた「城山」の碑がある山頂の曲輪くるわ（城の内外を土塁等で区画した区域）にたどり着きます。「女二城」の最西端にあたるこの場所には口栗野くちあわの防空監視哨ぼうくうかんししやう（64ページ）があり、麓ふもとからの高さは一二〇mと、四方を見渡すことができる城の最高所となっています。

この曲輪から南東に下る尾根上に小規模な平坦地を連ねた縄張りをもつのが「男二城」です。「男二城」は堀切ほりきりにより、さらに東側に延びる二〇mほど低い尾根と区別されます。低い尾根の両端には櫓台やぐらだいとみられる平場があります。

栗野城は、最高所の詰め曲輪と居館地をつなぐ尾根筋に連なる小曲輪群で構成され、巧妙な縄張が見られないことから、終末時には領国の防御拠点ではなく、街道の監視、つなぎの城、境目の城であったと考えられています。

現在、栗野城は公園として多くの市民の憩いいこの場となっていますが、現存する土塁や堀などの遺跡を守り伝えていくことで、中世の戦乱の世に生きた人びととわたしたちがつながる場所になっているのかもしれない。

《参考文献》

松尾元保 「古城趾探訪 五、栗野城址（其の一）」『広報あわの 第九九号』一九七三年
杉浦昭博 「栗野城と諏訪山城をめぐる一考察」『鹿沼史林・第四七号』二〇〇七年



▲城山（口栗野）
山頂から南東方向を望む。

諏訪山城―深程にあった堅固な城―

諏訪山城は、足尾山地の東端、標高二二四・二mの諏訪山に位置しています。北から東の麓には思川が流れます。思川は地元では小倉川と呼ばれており、史料的な裏付けはありませんが、諏訪山城主であった小倉氏に由来するといわれています。

また、諏訪山の名称は、城の南側にかつて諏訪神社がまつられていたことに由来するといひ、城の南東にある無量寿院の背後が諏訪神社の跡地だと伝わっています。

諏訪山城では、平成五年（一九九三）に、ゴルフ場の建設に伴い西曲輪の発掘調査が行われています。

●諏訪山城の成り立ち

西曲輪の発掘調査によって、諏訪山城の築城は南北朝の争乱期から室町時代初期であることが分かっています。

『皆川正中録』等の記録によれば、大永三年（一五二三）に下野最大の勢力である宇都宮氏と皆川氏が争った川原田の合戦において、栗野が皆川氏の勢力下におかれ、皆川氏が諏訪山城に入城しますが、そのときの城主は栗野城主の平野大膳であったと伝わっています。なお、『皆川正中録』には、事実誤認や矛盾がみられ、根拠とするには適さないという指摘もあります。

●諏訪山城の構造

『栗野町誌 栗野の歴史』にある伊谷野家記録によると、諏訪山城の大手口は無量寿院側に開かれていたこととなり、現在の無量寿院側から登る入城ルートが大手道と考えられます。無量寿院と南側の民家の建つ平坦地は居館跡と考えられます。二つの尾根筋の谷間を表（居館地）とし、裏山に詰めの城を築く形となっており、これは栗野城と共通する特徴です。

諏訪山城の縄張構造をみると、大きくは本城区域・中城区域・西城域の三つの区域に分けることができます。

本城区域は、諏訪山城で最も高い一曲輪を中心にして、二曲輪・東物見台・北物見台で構成されており、尾根上を削って平らにし、堀切（尾根を横に切断し敵の進入を防ぐ堀）をつくる南北朝の典型的な縄張形式が残っています。

中城区域は、三曲輪・南曲輪・水の手曲輪などで構成されており、空堀・土塁を構築し曲輪を囲む他、土塁を伴う堅堀や喰違い虎口など、戦国初期の築城技術がほどこされています。

西城域は、西側の尾根に沿って形成されている西曲輪地区です。

戦国時代の改築について、発掘調査報告書では大永三年に宇都宮氏と皆川氏が争った川原田合戦を根拠とし、戦国時代初期に中城区域を中心に改築が行われたと推定しています。しかし、川原田合戦は史実としての根拠に乏しいため、改築時期は、宇

都宮・佐竹の連合軍が皆川方の城を攻めた元龜元年（一五七三）の合戦から、壬生義雄が皆川と結び叔父の徳雪齋周長から鹿沼城を奪還した天正七年（一五七九）以降まで下ると考え、大手方面の複雑な縄張や虎口の遺構は戦国時代末期の状況を示しているとも見られています。

●地名に残る痕跡

諏訪山城の北側は「戸張」「西戸張」などの小字こあぜで呼ばれます。「戸張」とは、城の出入り口である虎口に建てられる見張りの場所のことであり、諏訪山城の北側に出入口があったことが考えられます。

また、諏訪山城とは別の城になりますが、久野に「寄居」という地名が残っており、ここには家臣団の集落が形成されていたと考えられています。このように、今も残る地名からも、かつて城郭が築かれた地域の歴史を知ることができます。

《参考文献》

松尾元保 「古城趾探訪 三、諏訪山城趾」 『広報あわの 第九号』 一九七三年

諏訪山城発掘調査団 『諏訪山城西曲輪発掘調査報告』 諏訪山城調査会、一九九六年

杉浦昭博 「粟野城と諏訪山城をめぐる一考察」 『鹿沼史林・第四七号』 二〇〇七年



▲諏訪山城（深程）

粕尾城―小山義政が扱った悲劇の城―

●小山義政の乱

鎌倉幕府を倒したあと、後醍醐天皇の「建武の新政」は失敗に終わり、吉野に難を避けた天皇の大覚寺統政権（南朝）と、足利氏の推す持明院統政権（北朝）との対立する南北朝時代といわれる混乱が六〇年ほど続きました。暦応元年（一三三八）室町幕府が成立しても戦乱は終わらず、関東に関東管領家を中心とする鎌倉府が出現し、京都の幕府に対立していました。

南北朝時代末期の康暦二年（一三八〇）五月、小山義政の乱が起ります。小山義政は鎌倉公方・足利氏満の制止をおしきって、宇都宮基綱の館を攻め、これを破りました。すると氏満は関東八カ国に義政追討を命じ、自らも武蔵村岡（埼玉県熊谷市）まで出陣します。八月、氏満の軍勢に居城の鷲城（小山市）を攻められた義政はいったん降伏します。しかし反鎌倉府の態度は変わらず、永徳元年（一三八一）二月、ふたたび討伐を受けました。これにより義政は降伏し、出家して永賢と号します。

ところが翌二年、またもや義政（永賢）は鎌倉府に反旗をひるがえします。義政は本城の祇園城（小山市）に火を放って脱出し、粕尾の山中に城郭をかまえて立てこもるなど抵抗を続けました。寺窪・櫃沢（中粕尾）や長野（下永野）の地に要害を

築きましたが、四月には赤石川原で自害しました。

●若犬丸の挙兵

このとき、義政の子・若犬丸は粕尾山中から脱出し、岩城田村郡（福島県三春町）三春城主の田村則義のもとに身を寄せます。その後、至徳三年（一三八六）五月、若犬丸は小山に戻り祇園城を占拠し、鎌倉府に反旗をひるがえします。下野国守護代・木戸修理亮元連の軍を破りましたが、足利氏満が自ら兵を率いて七月二日に古河（茨城県古河市）に出陣すると、若犬丸は氏満の攻撃を恐れて行方をくましました。

翌嘉慶元年（一三八七）五月、若犬丸が常陸小田城（茨城県つくば市）の小田孝朝のもとにかくまわれていることが発覚し、上杉朝宗らの軍勢に攻められます。若犬丸は常陸男体山城（茨城県笠間市）に立てこもり、一〇カ月もの攻防戦を続けます。しかし落城し、若犬丸はふたたび三春城の田村則義・清包のもとに逃れ、再挙をはかることとなります。

●若犬丸の最後

応永三年（一三九六）二月、若犬丸は南朝方の新田義宗の子・新田相模守やそのいとこ刑部少輔らを味方に引き入れ、陸奥国（福島県）の田村荘で三たび挙兵しました。足利氏満は、関東一〇カ国の軍勢を引き連れ、二月二八日鎌倉を出発し結城満朝

の館（福島県白河市）に入りました。これを聞いた若犬丸は会津に逃亡し再挙をはかりますが、支えきれずに同四年正月、自害しました。

●各地に伝わる悲話

栃木市の寒沢林道の奥地に、義政の正室・芳姫よしひめの墓所があります。芳姫は、小山義政が粕尾城に立てこもった際、そのあとを追って星野（栃木市星野町）までたどり着きましたが、金品に目がくらんだ村人に殺されてしまったといえます。しかしその犯人は白蛇と化した芳姫とその侍女じじよの亡霊に苦しめられ一家は滅亡してしまいました。その後、星野の村人が芳姫らを供養するため建てたのがこの墓であると伝わっています。現在、倒木などにより寒沢林道の奥へ行くことは困難になっていますが、「小山芳姫の墓保存会」により大応寺だいおうに小山芳姫のお堂が建てられています。

また、神奈川県横浜市金沢区には若犬丸の二人の子どもにまつわる悲しい伝説が残ります。若犬丸が自害した際、兄の久犬は七歳、弟の宮犬は五歳でした。母と共に民家に隠れているところを葦名直盛あしななおもりの兵に発見され、鎌倉に送られ、六浦むつらの海に沈められてしまったといえます。この兄弟の悲話は、鹿沼から遠く離れた金沢区で「金沢のおかし話」として伝わっているほか、栗野町文化財保護審議会の調査によって発見された兄弟の墓

所が現在も残されています。

このように各地に残された悲話からは、戦乱の世に生きた妻子の悲しい生涯をうかがい知ることができます。

《参考文献》

『広報あわの 第二七三号』一九八八年
杉浦昭博「小山義政粕尾挙兵と粕尾の城について」『鹿沼史林・第五一号』二〇一一年



▲粕尾城（中粕尾）



小山義政

掛かれいっ!

宇都宮基綱

無念!
ぐうッ...

康暦2年
(1380)5月、
小山義政は、以前
から対立していた
宇都宮基綱と下野
国蒙原で戦いこれ
を破った。



これに対し6月、
鎌倉公方・足利氏満
は、関東八国に命じ
義政追討の軍を起こ
した。

義政を
討つのだ!

足利氏満

義政は降伏した。



降参してなお
不遜な動向を
見せる義政に
対し、氏満は再
び討伐軍を差し
向けた。

敗退した義政は、
出家し鎌倉に
恭順の意を示すに
見えた。



が、しかし—

永徳2年(1382)
3月、居城祇園城に
火を放ち逃亡した
義政は、粕尾山中に
立てこもり三度目の
叛旗を翻した。

抗うのだ!



若丸を逃がした
義政は赤石河原で
自害した。
享年33歳という



お前は
此処を
抜け出て
再起を
図るのだ

はッ
父上!

小山若丸
わがめまる



氏満は三度
義政を討つべく
軍を起し
柏尾城に迫った。

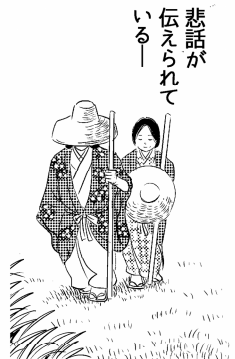
来たな
氏満!



江戸時代にこれを
哀れんだ村人が芳
姫の墓を立てて供
養したという。



義政の正室・芳姫は
夫のいる柏尾へ向か
つている途中、金品に
目の昏んだ村人に
殺されてしまったと
いう。



悲話が
伝えられて
いる



陸奥国白河
で挙兵した
若丸に対し、
(1396年)
2月、氏満は
討伐軍を発し、
合戦に及んだ。



落ちのびた
若丸は奥州の
田村庄司則義を
頼った。

我らと
共に戦い
ましょう
ぞ!

田村清包
きよかむ

田村則義
のりよし



若丸の幼子・宮犬と久犬も
捕らえられ、鎌倉府により
六浦の海に沈められたという



追い詰められた
若丸は逃亡の果て
奥州会津で自害した。